



奈良・高畑の景観保護

岡田 安弘

「偶然」が続いた。不思議に思い、書店で解説本を手にする。「そもそも偶然はない。全て必然」。不意打ちをくらう。目次だけで、立ち読みを退散した。

奈良市高畑の洋画家、中村一雄氏と紀矩子夫人に出会ったのが偶然の始まりだ。夫人は大津の高校でクラスメート、男子生徒の憧れだった。

「マドンナは奈良の画家に嫁入り」。噂話が届く。奈良に長く住む友人に「画家の嫁で大津出身なんだけど?」と聞いてみた。即答に驚く。「娘がバイトをしていた『茶論』のママに違いない。夫婦とは親しくしている」と言う。

ほどなく、奈良に転勤。友人が「この偶然は神のさい配だ。会いに行こう」と案内役を買って出た。赤瓦の土塀をくり抜いた木戸。「本日休み」の札。仕方なく居酒屋へ。冷酒の土佐鶴300mlを二人で20本ほど空にした。暖簾をくぐるアベックに目が止まる。女学生の面影を残す。「紀矩ちゃんだ!」。

高校卒業後、電話も手紙も交わしていない。きょとんとする彼女。寄り添うのは夫の画家だろう。友人が「一杯やりませんか」と留守電を入れておいてくれた。粋な計らいに感謝。

悪童仲間でマドンナを囲む会を結成。画家に淡い嫉妬を抱く一行は、たびたび『茶論』に押し掛ける。懲りずに付き合ってくれた一雄氏。親しみを込めて「画伯」と呼ぶ仲になる。

「君と同じ名字の画家が大津にいるはずだが?」と問われる。弟のことだ。「えっ! 本当か、日展を競った仲や。不思議な縁やなあ」。弟は大学進学を前に絵の世界を退いていた。

高畑は春日大社の禰宜らが住む社家町だった。志賀直哉が「暗夜行路」の後半を執筆した数寄屋造りの旧居と、南仏・プロバンスの田舎家を

模した築百年の洋館が小道を挟んで並ぶ。ともに平成12年、登録有形文化財に指定され、異色の景観を形成している。観光客の人気スポットだ。

画伯の父、義夫氏も画家。レオナルド・フジタと同時代をパリで過ごす。この洋館は義夫氏の仲間が建てた。転居したので義夫氏が買い取り、長男の一雄画伯が引き継ぐ。ヒマラヤスキの庭が、喫茶「たかばたけ茶論」だ。

2019年1月、画伯は病魔に襲われ、みまかった。83歳だった。精悍な顔が浮かぶ。

志賀直哉旧居の保存に力を尽くした。文豪の集う旧居は「高畑サロン」と呼ばれた。時移り厚生省の宿泊施設に。建て替え計画が浮上、取り壊しの阻止に立ち上がる。全国3万人の署名を集め、文化庁に直訴。奈良学園が全面保存の約束で買い取り、セミナーハウスとして活用されている。行政相手の4年に及ぶ険しい道のりは、著書「文化財保存の草の根運動」に記す。

今日出海・文化庁長官(当時)から「志賀さんの旧居よりも高畑の風土を守りなさい」と言われる。「ずしんときた」と、唇をかみしめていた。

晩年はメキシコや欧州のスケッチ紀行に出かけ、2011年10月の渡仏は1か月に及ぶ。パリから一路、マルセイユへ。90年前に父が滞在した丘陵地を目指し、父の作品と同じ風景を描く。長男陽一から旅先にメール。「日本ジュエリーアート展に入選した」。彫金作家としてのデビューだ。紀行日誌に「父を懐かしむと言うより、不思議な気持がこみあげた」と書いている。父への敬意、門出を飾った我が子への期待。短い言葉に思いがこもる。

交流30年、電話が最後の会話になる。「欧州に比べ日本は電柱が景観を損ねている。電柱を地下に移す運動に取り組む」と話していた。今さんの言葉が背中を押したのだろう。地元で住民説明会を始めたばかりの他界。その無念を思うと、せつない。